

生命倫理に関する講演会のご案内

「生命倫理学と医学の未来像」

京都大学名誉教授

公立鳥取環境大学名誉学長(初代学長)

加藤 尚武 先生

【日時】 10月25日(木) 午後5時30分～7時30分

【場所】 医学部 臨床講義棟1階 小講義室

【内容】 新しい医療技術、生命操作技術、化学物質の開発の速度は、ヒトの個体に即して安全性、効用、QOL評価を確定する作業の進展速度を超えている。新技術とヒトの生命の間に、危険な接点がつねに新しく発生することは避けられない。安全性についての科学的テスト、有効性についての公共的な評価、個人のQOL評価と同意に関して、どのような社会的許容のための合意システムを採用するかという点に、生命倫理学の発言の場がある。

技術開発の利益を優先する開発主義、個人の自己決定権の拡張をもとめるリバタリアンの態度、社会的貢献を重視する功利主義が、発言の機会を狙っている。しかし、議論はいつも「その都度主義的」で、安楽死、高齢者医療、生殖補助医療、遺伝子治療などの局面に応じた議論が、現れては消えて拡散していき、持続的な相互連関的な波及やネットワーク的展開を示すことはない。しがって、生命倫理学は全体として、拡散し、統合の中心を失って、アノミー化する傾向を強めている。

統合への方向付けを意図的に行おうとすると失敗する。技術面における多様化と分散の潜在力が強いからである。「分子生物学」が登場したとき、生物学と化学が統合されるという道が切り開かれるのではないかという期待はあった。じっさいには生命領域への化学的方法の導入は、まったく新しい技術領域を生みだして、多様化は促進された。

法律、倫理、政治などの非自然科学的方法論の領域は、新しい生命科学が登場する前からすでに沈滞化の時代に入っていた。自由主義+民主主義が最大の合理主義を実現するだろうという啓蒙主義の夢は、情報の海の底に沈むゴミと化しつつある。

希望はある。「宇宙が137億年前に生まれた」という文字で書き始められる、たくさんのお書物が書かれ、太陽系の寿命が計算されるという全自然史のイメージが、われわれの知に与えられるようになった。自然科学のなかからより統合化された自然像が生み出され、あらゆる文化がすべて全自然史のなかに書き込まれるなら、さまざまな統合の芽がそこから萌えたくてくる。

- 本学の全ての教職員・学生を対象に『生命倫理に関する講演会』を開催します。多数のご参加をお待ちしています。
- この講演会は、大学院における『研究・生命倫理概論』の講義として開催しますので、該当する大学院生は出席して下さい。

【主催】 医学研究科 学務委員会